

# 史學雜誌

## 研究ノート

海軍と在郷軍人会	木村 美幸	1
第一次大戦下の中国関税引き上げ反対運動 ——寺内内閣期の対中政策と国内政治——	藤井 崇史	27
コラム 歴史の風 イタリアの中世祭りと歴史家の社会貢献	大黒 俊二	52
書評 山口英男著『日本古代の地域社会と行政機構』	鷺森 浩幸	55
吉田律人著『軍隊の対内的機能と関東大震災 ——明治・大正期の災害出動——』	一ノ瀬俊也	61
西江清高著『西周王朝の形成と関中平原』	飯島 武次	69
砂田徹著『共和政ローマの内乱とイタリア統合 ——退役兵植民への地方都市の対応——』	毛利 晶	77
新刊紹介		85
文献目録：日本史 V		93
会告		134

第128編 第11号

公益財団法人  
史 學 會

# SHIGAKU-ZASSHI

Vol. CXXVIII

Nov. 2019

No. 11

## Research Notes

The Japanese Imperial Navy and Local Reservist Associations\*  
*KIMURA Miyuki*

The campaign against rising Chinese tariffs during World War I: Domestic Japanese politics and the Terauchi government's China policy\*  
*FUJII Takashi*

## Columns

*Festa medievale* and historian's social role in Italy

*OGURO Shunji*

## Reviews

YAMAGUCHI Hideo, *Local society and administrative organizations in ancient Japan*, Tokyo, 2019. *SAGIMORI Hiroyuki*

YOSHIDA Ritsuto, *Internal functions of the Japanese military in relation to the Great Kanto Earthquake: Disaster mobilization during the Meiji and Taisho Eras*, Tokyo, 2016.  
*ICHINOSE Toshiya*

NISHIE Kiyotaka, *Shaanxi's Guanzhong Plain and the formation of the Western Zhou Dynasty*, Tokyo, 2019.

*IIJIMA Taketsugu*

SUNADA Toru, *Republican Rome's civil wars and the national integration of Italy: The response of regional cities to Sulla's Veteran Settlements*, Sapporo, 2018.  
*MORI Akira*

## Brief Notices

## List of Recent Publications

(\*Summaries in English included in this issue)

## SHIGAKUKAI

(THE HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN)  
TOKYO, JAPAN

## コラム 歴史の風

## イタリアの中世祭りと歴史家の社会貢献

大黒俊一

大学の社会貢献や地域との連携が求められている。歴史家も大学を構成する一員としてその一翼を担うよう求められている。とすれば、大学人としての伝統的な研究・教育に加えて社会貢献や地域連携はどのような形をとるべきなのか。それは単なる余技なのか、それとも研究・教育と並び立ちそれらと一体をなすような活動なのか。こうした問いは数年前、大学の地域貢献を目的とする雑誌に求められて「外国史は地域に貢献しうるか?」という小文を寄せて以来、私の脳裏を去らない問題である。この問いにいまだ明確な結論が出せるわけではないが、最近この問いをこれまでとは別の角度から考え直す経験をした。

その経験とは、イタリア中部ウンブリア州の小都市ベヴァニヤ Bevagna で開催される中世祭り「ガイタの市場」 Il Mercato delle gaite を見学したことである。ベヴァニヤは人口五千人ほどの小都市ながら、毎年六月末に開催される中世祭りは今ではイタリア全国、いやイタリアを超えてその名を知られるユニークな祭りとなり、「ベヴァニヤ化」 bevagnizzazione という新語まで生まれているほどである。こうした噂は私も以前より耳にしており、そのユニークさとはどのようなものなのか自身の目で確かめて中世生活の再現に取り組む。その成果が祭りで公開され、祭り最終日に審査員の評価を受ける。審査は料理、手工業、商業の三部門にわたって行われ、これに射撃（スリンケショット）を加えた四部門の総合で最高点を得たガイタがその年の勝者となる。祭りの山場はこの審査の場面である。今回私は、祭りの学術顧問を務めるフランコ・フランチエスキ氏（シエナ大学、中世史）の計らいで審査の場面を見学することができた。

審査は各部門ごとに三名の専門家によって行われる。私が見学したのは商業部門である。中世風の衣装に身を包んだ三名の審査員が、街路をめぐりながら各所に再現されている中世の店舗や作業場で立ち止まり、再現の正確さを自身の専門知識と上記の一つの基準にそって採点していく。立ち止まつた審査員の前では当該店舗・作業場の商人や職人が寸劇を演じてみせる。寸劇といつてもその台詞や所作は中世の取引や手工業の現場を再現したものである。たとえば博労は、商品の馬を前に買い手と価格交渉をしてみせるが、両者の丁々発止のやりとりが厩の作りや博労の衣装などとともに評価の対象となる。寸劇は審査の場にはピンと緊張した空気が張りつめ周囲の誰も声を発しない。こうした審査の後、審査員三名の採点結果を統計して当該部門の優勝ガイタが決まるのである。最終的には四部門の点数総計で一位を占めたガイタがその年の優勝ガイタとなる。

このような中世祭りのあり方は大学の歴史家にどのような示唆を与えるのであろうか。ベヴァニヤの祭りでは上記フランチエスキ氏が学術顧問として再現活動全般にわたって助言をあたえ、

かめてみたいと思っていた。つまり発端は単なる好奇心であった。

中世祭り自体はイタリアに限らず現在ヨーロッパ諸国では珍しくなく、むしろ盛況というべきだろう。後述するピサ大学研究チームの調査によれば、トスカーナ州だけでこの種の祭りは現在一〇〇を超える。大都市だけでなく草深い田舎の村レベルにまで及んでいるという。ただ、こうした祭りはいずれも同工異曲で、中世風の衣装を身にまとった人々が中世のレンジにそった料理を出し、中世音楽を演じ、中世の職人技を実演し、中世の芝居を演じあるいは騎士の剣劇や競馬を披露して観光客を楽しませるといったものである。

ベヴァニヤの祭りもこの点では他と大きく異なる。ベヴァニヤが特異なのは、こうした中世生活の再現を可能な限り史実に忠実に行い、その忠実さを競い合うという形をとっていることである。祭りのためにベヴァニヤの町は四つのガイタ gaita (街区、ランゴベルト起源の言葉) に分かれ、各々のガイタが一年かけて自身のガイタ内に中世を再現する方法を考案する。再現には一つの基準が実行委員会によって設けられており、一つは薄然とした中世ではなく一五〇〇年から一三五〇年という特定の期間を再現すること、もう一つは現存する一五〇〇年の都市法の規定にしたがって再現することである。一五〇〇年都市法はそれ以前の都市法の集成として都市生活を細部にいたるまで規定しており、それゆえ再現のための基準として採用されたのである。各ガイタの市民たちは古文書や歴史の研究書を読み、古老人に聞き、専門家に意見を求めて、入手困難な材料を調達するなどして、一年

審査員は皆その分野の専門家、多くは大学の歴史教員である。ここには大学の歴史家がその専門知識によって地域に貢献する姿を見て取ることができ、「見したところ大学の社会貢献、歴史家の地域連携の模範例のように見える。しかしことはそう簡単ではない。

こうした問題を考える上で基本的な情報を提供し、考察の糸口を提供してくれるのがピサ大学のメンバーによる研究プロジェクト「過去を再現する」 Rievocare il passato である。現在も進行中のこのプロジェクトは現在トスカーナ州内で行われている歴史祭り一四〇件を総合的に調査し、その特徴や傾向を明らかにしようとしている。その成果は随時ホームページに掲載され、またプロジェクトと同名の報告書も出版されている。ホームページ上には一四〇の祭りについてその場所、名称、開催期間、主催団体、対象とする時代、祭り内容のキーワード（料理、手工業、競馬、行列など六五項目）が掲載され、さらにこれら情報が地図上にマッピングされている。

以上のような基本情報をもとに、「過去を再現する」祝祭が現代において持つ意味をさまざまな角度から考察しているのが同名の報告書である。報告書での議論は多岐にわたるが、ここでは大学の社会貢献や歴史家の地域連携に関する議論を取り上げてみたい。論者の一人エンリコ・サルヴアトリによれば、こうした祭りへの歴史家の関わりには四つの段階があるといふ。第一は審査員、第二は助言者、第三は協力者、第四は提言者・組織者であり、この順に関わりは深くなる。ベヴァニヤの例でいえば、大学人が関わるのは第一の審査員、第二の助言者（フランチエスキ氏）ま

であり、第三の協力者、第四の提言者・組織者はいない。ちなみに、協力者は祭りの組織化に加わって指導し、提言者・組織者はさらに祭りのコンセプトそのものを提示して全体を牽引する。ベヴァーニャに限らず多くの中世祭りにおいて大学の歴史家の関与は第二の助言者にとどまり、協力者や提言者・組織者の段階まで行く者はほとんどいないという。助言者のレベルにとどまる歴史家の関与をどう評価するかは微妙な問題である。サルヴァトーリは、助言者の「線」を越えようとしないアカデミーの歴史家を受け身で及び腰だといつて批判し、アメリカのパブリック・ヒストリアンを例に歴史家も象牙の塔を出て祝祭に全面的にコーシットすべきだと主張する。しかし「ガイタの市場」を見学しその後この祭りの歴史を調べた私の目には、彼女の主張は問題を単純化しているように思われる。彼女の議論には地域の主体性に対する根線が抜け落ちている。「ガイタの市場」を見る限り、この祭りを組織するベヴァーニャの市民たちは専門家に審査員や助言者は求めても協力者や提言者・組織者は求めていない。彼らは必要に応じて専門家を「利用」しているのであり、祭りの主体はあくまで市民である。市民たちの下からの熱意が歴史家の協力を求めているのである。とすれば協力を求める歴史家も助言者といふ「線」を尊重せざるをえないだろうし、その「線」を越えることで生じる問題を意識するだろう。ベヴァーニャの例は専門的歴史家と地域との関わりの微妙な均衡点を示しているように私には思われるのである。

もとよりこうした均衡が成立するためには、地域がみずから祭

りを考案し発展させる巨大なエネルギーが必要である。ベヴァーニャ以外にもいくつかの中世祭りを見た私の経験からは、このエネルギーがどこから湧いてくるのかいまだよくわからない。しかしこれはこれで別の問題であり別の機会に考えたい。

注(1) 「外国史は地域に貢献しうるか? (Linkを読む)」『Link【地域・大学・文化】』(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報)第八号(一〇一七年)、一〇六一〇九頁。

(2) 祭りの概要是以下のサイトを参照 <http://www.ilmercatodelle-gaite.it/> (一〇一九年八月三一日閲覧)。

(3) <http://rievocareilpassato.cfs.unipi.it/> (一〇一九年八月三一日閲覧)

(4) F. Dei e C. Di Pasquale (a cura di), *Rievocare il passato: memoria culturale e identità territoriali*, Pisa University Press, 2017. 本書は以下のサイトから無料ダウンロード可能である (一〇一九年八月三一日閲覧) <https://archive.org/details/RievocareIlPassatoMemoriaCulturaleEIdentita97886741899218088631>

(5) E. Salvatori, 'Il public historian e il revival: quale ruolo?' in *Rievocare il passato*, pp. 131-138.

(6) この祭りの歴史については *Il Mercato delle gaite di Bevagna. La riscoperta della tradizione*, Foligno, 2019, pp. 25-152参照。

Un ringraziamento particolare a prof. Franco Franceschi dell'Università di Siena e Yoko Saito di Perugia per avermi fornito le notizie preziose e guidato nel giro del Mercato delle gaite.

## 書評

山口英男著

### 『日本古代の地域社会と行政機構』

鷹森浩幸

本書は山口英男氏の長年にわたる研究の集成である。もちろん、本書が著者の研究のすべてではなく、主要な論考をすつきりとまとめたといえるであろう。まず、目次は次の通りである。( )内は初出年。

#### 序章 本書の視角と構成

#### 第一部 国郡行政機構と地方政治社会

第一章 郡領の銓選とその変遷(一九九三年)

第二章 十世紀の国郡行政機構(一九九一年)

第三章 地域社会と郡司制(一〇〇四年)

#### 第二部 牧の制度と社会

第一章 ハ、九世紀の牧について(一九八六年)

第二章 文獻から見た古代牧馬の飼育形態(一九九四年)

#### 第三部 「額田寺図」の作成と行政機構

第一章 額田寺伽藍並条里図の復原をめぐって(一九九三年)

第二章 額田寺伽藍並条里図の基礎的研究(一九九六年)

## 書評

#### 第二章 額田寺伽藍並条里図の作成過程について(一〇〇一年)

#### 第四章 古代莊園図に見る寺域の構成(一〇〇一年)

#### 第四部 書類の機能と業務解析

第一章 正倉院文書の「書類学」(一〇一六年)

第二章 帳簿と木簡(一〇〇〇年)

第三章 正倉院文書の縦文について(一九九九年)

大きく四つの領域にわたり、相互に密接に関連を有するわけではないが、通底するのは行政機構やその動向である。序章で示されるように、「社会と制度の歴史的変化の相互関係を解明することを通じて、歴史の展開の実際をできる限り具体的に理解」するために、「地域や社会のあり方とそれをめぐる行政機構の様相、そしてその歴史的変化」を検討したのが本書である。以下、評者の興味に従って部ごとに紹介、評価を試みる。

#### 第一部

郡司を中心的なテーマとする論考群である。第一・二章は実証的な論考である。第二章は講座の収録論文であり、全体的な主張がよくまとめられていると思われる。

第一章は令制から九世紀初頭までの郡司用制度を扱った論考である。それまでの研究について制度の論理の解明においてやや不十分との認識に基づき、任用制度の変遷を論じたものである。大宝律令の制定の段階から郡領の銓選には実態として講第と労効の二つの基準が用いられたが、法令によって明確に定められたものではなく、天平七年(七二五)制は実態を成文化し、銓選対象